

## 第2回分科会活動報告

日時：2013年 6月27日（木）～28日（金）

場所：【第1日】熊本大学 黒髪キャンパス 【第2日】東海大学 阿蘇校舎

出席者：【第1日】44名 【第2日】43名

記録者：平石 泰介（東海大学）

### 1. 配付資料

- 1) 2013年度第2回第二分科会プログラム
- 2) 2013年度第2回第二分科会参加者名簿
- 3) 熊本大学事例紹介レジュメ（2部）
- 4) 東海大学事例紹介レジュメ
- 5) 第5回情報戦略フォーラム（ご案内）
- 6) 懇親会会場のご案内

### 2. 研究活動内容

#### 【第1日】熊本大学 黒髪キャンパス

##### 1) 全体会 13時00分～13時10分

- (1) 運営委員長より開催挨拶
- (2) 幹事会より連絡
- (3) メディアコミュニケーション局より連絡

##### 2-1) 事例紹介①「ICTによる教育支援の取り組みと組織及びシステム連携について」

13時10分～14時

熊本大学 総合情報基盤センター長 中野 裕司氏

熊本大学総合情報基盤センターは、情報基礎教育と全学の情報系業務統括部署として、教員5名、技術職員3名（補佐員数名）で構成されている組織である。また、eラーニング支援窓口としてeラーニング推進機構を設けており、教員2名、技術職員1名（補佐員約10名）で構成されている。

熊本大学におけるICT活用は、2001年の総合情報環構想に基づく総合情報基盤センターの設立から開始された。2009年度までの第一期中期計画では、全学必修ICT活用教育を開始、LMSや熊本大学ポータルを全学的に導入した。2010年度からの第二期中期計画では、全学eポートフォリオの試験運用開始などに取り組んでいる。この総合情報環構想は、情報教育・研究開発・技術支援拠点であるマルチメディア情報教育・研究開発センター、学術情報サービス拠点である附属図書館、電子事務局サービス拠点である事務局、この3つの柱（教育－図書－事務）が中心となった。

全学部必修とした情報基礎科目は、内容を全学で統一できるようLMSを活用した。全てのテキストや確認テスト、課題をLMS上で提供し、実習は教員の指導とTAによる補助の元で

PC教室を利用している。2週間以内に何度でもチャレンジできるLMS上のオンラインテストでは、解答人数と受験回数ならびに得点の相関関係を検証し、課題提供側の問題を「見える化」することもできている。

学務情報システム（S I S）では、学生の立場からは、履修計画作成や履修登録、成績確認、教職等資格取得サポートや証明書発行、シラバス図書館との連携が可能となっており、教員の立場からはシラバス入力や成績入力が可能となっている。

このように、ICTの活用は、利便性の向上だけでなく、教育の質的向上も実現できると考えられる。学務情報システム（S I S）による学修計画立案支援、前述のLMSによる効率的・効果的なオンラインテストがその代表例である。

しかし、効率的かつ教育効果の高いICT活用教育の実現には、LMSの機能と教授法の両方の知識が必要であり、その考えに最も近いのが「ID（Instructional Design）」（教育の効果と効率と魅力を高めるための体系的なアプローチに関する方法論）であるという認識に至った。その担い手であるIDの専門家（IDer）が日本では極めて少ないことに鑑み、熊本大学ではIDの知見を有するeラーニング専門家を養成する大学院を創設した。この日本初100%オンラインのeラーニング専門家養成大学院「教授システム学専攻」は、IDに基づく授業・カリキュラム設計、全国区の大学院（東京在住の受講生が最も多い）、ほぼ全員が社会人学生等の特徴がある。

全学的なICTによる学習支援体制の事例として、熊本大学ポータルとシングルサインオン（SSO）による学習環境整備が挙げられる。約20のアプリケーションをSSOによる統合認証で整備し、各教育関係システムとの連携を実現している。この中で、Webアプリケーションの増加に伴い、メンテナンス・開発の両面で人手不足の問題が生じており、大学の枠を超えた連携が必要となっている。

2010年度から進められている第二期中期計画では、利用者の環を増やすこと、サービスの環を充実させることを柱に、総合情報環構想が発展的に見直された。

その中心となるeポートフォリオでは、修了者のコンピテンシー（学習効果）を予め定義すること（シラバス登録時に7つの学習効果のうち1つを必須選択させている）や、全科目の学習成果物・履歴をLMSに保存することなどを前提に、学習効果をマトリクスで表示している。ただ、全学的に展開するにあたり、諸課題と解決に向けた取り組みが今後求められている。今までの経験を基に、eポートフォリオの戦略は「トップダウン」「ボトムアップ」双方の取り組みが必要であり、粒度が大→小（トップダウン）と小→大（ボトムアップ）の検討項目は最終的に統合か連携していくものと考えられる。

## 2-2) 事例紹介②「ICTによる教育支援における事務組織の役割とその取り組み事例の紹介」

14時～14時40分

熊本大学 運営基盤管理部 情報企画ユニット 河津 秀利氏

熊本大学の事務組織は、学長・理事・副学長以下6つの部局、その配下に各業務ユニットが組織されている。情報システムを保有している部署は、医学部附属病院事務部医事ユニット、教育研究推進部図書館ユニット、運営基盤管理部情報企画ユニットの3部署である。

2002年から事務組織の統合が進められ、現運営基盤管理部情報企画ユニットは経理部情報処理課と学生部教務課情報教育係が基になっており、組織統合と並行して人員削減も行われている。現在の情報企画ユニットは、ユニット長、チームリーダー、総務担当が1名ずつ、業務システム担当5名、情報戦略担当2名で構成されている。

熊本大学の運営基盤の整備充実に努め、より効率的で安定した大学運営体制を構築していく運営基盤管理部のミッションの下、情報企画ユニットは事務運営を円滑化するため、高度で安定したIT職場環境を構築する役割を担っている。各種システムの運用に携わり、業務内容の多様化が進むにつれて、ユニットが抱える負担が大きくなっていると実感している。

平成15年度から4年間、特色GP15「IT環境を用いた自立学習システム」に採択された。履修過程支援と学習情報支援を目的として、学務情報システム(SOSEKI)の機能強化、SOSEKIと他システムとの連携(シラバスと図書蔵書情報をリンクさせるなど)、CALL学習進捗状況表示システムの開発を進めた。

CALL学習進捗状況表示システムは、CALLクラスと呼ばれる学部生1年次生全員と2年次生半数が履修する必修科目で利用されている。1クラス50名程度、CALL教材60分と教員による副教材30分の授業構成、学習ノルマを課すことにより授業外での学習が求められる。

CALL学習を進める上で、学生は今の自分の学習ペースで大丈夫か、他の学生の進捗ほどの程度かといった不安を抱えていた。一方教員側は、学習履歴情報は閲覧できるが数字ばかりでは把握し難いので、クラスの状態をもっと視覚的に把握したいというニーズを持っていた。これらの課題解決のため、CALL学習進捗状況表示システムは、同クラス受講者の学習状況を共有し、学生と教員の双方が学習進捗状況を把握しやすいシステムとなっている。

学習ペースを把握するための「総学習時間に対する終了ユニット数」、個人の学習時間を把握するための「個人別の学習時間」、毎日短時間でも学習しているか把握するための「学習日毎の学習時間」、これらを要件毎に分布図やグラフ等により表示させることができ、学生個人または全体の状態を視覚・直感的に把握することが可能である。

その他に、授業改善のためのアンケート結果公開システム、証明書発行システムを熊本大学独自で開発・運用している。証明書発行システムにおいては、証明書発行機クライアントも安価で独自設計し、全学で9台導入している。この証明書発行サーバを活用し、証明書発行システムが持つ情報を再利用することにより、成績参照システムや履修カルテシステム(教職)、学生証再発行申請システム、学生案内・学生便覧閲覧システム(上級年次になっても入学時に配付している学生便覧を閲覧できるシステム)を運用している。

熊本大学公式Webサイトの運用においては、情報発信者による軽微なコンテンツ修正を可能にしながらも、何でも無用に修正されないよう権限を切り分けてコンテンツ管理を行っている。広報戦略ユニットが運用を主導し、情報企画ユニットや工学部技術部、総合情報基盤センター、eラーニング推進機構で熊本大学公式/教職員Webサイト運用チームを構成し、Webサイトシステム利用研修会も開催し、啓蒙活動を行っている。

### 3) 施設見学と紹介 (eラーニング推進機構、五高記念館)

14時50分～15時40分

#### 4) 討議「学生のための教育支援って？」（ワールドカフェ形式）

15時50分～17時00分

座長：須藤（関東学院大学）・平石（東海大学）

(1) 座長より討議内容説明

(2) 各グループの討議記録（各グループホストからの内容報告）

##### ①吉田（関東学院大学）＜教務グループ＞

###### ・キーワード1「怖くない窓口」

教務課窓口は学生から見ると大変厳しいところで、できたら関わりたくないと思っている学生が多い。まずは学生が支援を求めて来てくれるような関係性を築くことが重要である。

###### ・キーワード2「学生の背中を押してあげるような支援」

学生が、気が付いたら問題が解決できていた等自然な形でサポートをしていくことが大切である。自らが進んで動けるように気付きを与えるような支援をする。

###### ・キーワード3「バランスが重要（支援と甘やかしの）」

何でもかんでも手を差し伸べるのではなく、学生自身が行うことは自分で実施させる。支援と甘やかしのバランスを考えながら教育支援の方法を考える必要がある。

###### ・所見

今回の研修では、熊本大学様の ICT による教育支援の取組みや、東海大学阿蘇校舎様の地域貢献の取組み等いろいろな方法で教育支援を行っていることがわかり、大変参考になりました。

またワールドカフェでは、教務部門の方々と同じテーブルお話しすることができ、教学部門での教育支援の方法について意見交換ができました。色々な方と意見交換する中で、私は教学部門の事務スタッフが行うべき教育支援の目標は「いかに自立した社会人を育成するか」なのではないかと感じました。

我々は、様々な場面に遭遇し困っている学生を自らの力で問題解決できるよう自然な形でサポートして、このような問題解決の積み重ねにより自信を持って就職するまでをサポートできたら良いのではないかと思います。

そのためには、学生から頼ってもらえる組織になる必要があると思います。私自身、もっといろいろな知識やスキルを身につけ、またコミュニケーション能力を向上し学生対応していかなければいけないと感じました。

最後に、今回このような素晴らしい経験をさせていただきました熊本大学の皆様、東海大学阿蘇校舎の皆様、そして富士通のスタッフの皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

##### ②北田（産業能率大学）＜情報グループ＞

###### ・キーワード1「学生からの意見」

システム系の部署としては学生サービス向上のため様々なシステムを構築するが、作りっぱなしではなく、学生と直に接する窓口部署の意見を聞きながらよりよいものを作っていくことが大事。また、当然ながら実際に使用する学生の意見を聞く仕組みを確立す

ることが重要。Facebookの「いいね」ボタンみたいなものをつけるのもいいかも、という意見が出ました。

- ・キーワード2「過剰サービス」

学生に対するサービスが充実するにつれ、学生の成長を阻害する部分もあるのではないかという意見。休講情報などが自動で携帯に配信されるのは便利だが、自分で情報を収集する姿勢や方法を身につける練習ができない。また、学生も便利になりすぎたことで逆に自由がなくなっているのではないか。

- ・キーワード3「大人として対応する」

システムとは話がずれてしまうが、学生を大人として扱い、真摯に対応することが重要。自分の部署の仕事の範囲でだけ接するのではなく、時には言葉遣いを正したり、間違ったことには注意したりする。学生の将来にいい影響を与えられるように行動することが大事。

- ・所見

「学生のため」というテーマに対して、どのように解釈し、アプローチするか最初は戸惑う場面もあった。部署によって直接学生をサポートする場合、窓口部署や教員をサポートすることで間接的にかかわるケースがある。ただしどの場合においても最終的には学生のためになることを念頭に置くべきであり、最終的には「学生が自ら学びたいと思えるようにする」ということが目的である。サポートしすぎるのは良くない、サポートしないとどうなるかという状況の中でバランスをとりながらその方法を模索していく必要がある。システム系の部署の課題は、従来のシステムや新しいシステムを有効に活用しながら、いかに効率よく学生を伸ばせるかが重要だと考えられる。教員だけが教育に携わるのではなく、職員もその一翼を担っているという自覚を持つべき。

### ③加藤（東海大学）＜情報グループ＞

- ・キーワード1「学生の能力成長の最大化」

「学生のため」とは何かを考えたとき、それは、入学～卒業までの能力の成長を最大化させることである。また、それを測れるものが必要。「学生のため」＝「学生サービス」かもしれないが、それが甘やかしになってはいけない。

- ・キーワード2「自分で学ぼうという気にさせる」

「教育支援」とは何かを考えたとき、それは、自分で学ぼうという気にさせることである。知る喜びを伝える、興味を持たせる、考えさせることが必要。

- ・キーワード3「学生支援と教員支援」

職員として、学生を支援する立場と教員を支援する立場がある。その両立場の重なり合う部分が重要であると考えられる。

- ・所見

システム部門としては、「学生のため」「教員のため」「職員のため」…等々、ユーザーのためのシステム導入を行うが、「(学生)サービス」＝「甘やかし」になってはいけないところに難しさを感じる。

特に学生に対しては、「支援」と「指導」の区別をつけ対応する必要があると感じた。現在の私の部署は直接学生対応することはほぼなく、教職員対応が主であるが、対教職員の

支援が、学生の能力成長にもつながると思うので、一職員として、甘やかしては「学生のため」に今できることを行っていきたい。

## 【第2日】東海大学 阿蘇校舎

### 1) 全体会 10時30分～10時45分

- (1) 運営委員より開催挨拶
- (2) 東海大学農学部長 村田達郎様より会場校ご挨拶

### 2) 事例紹介「黒川学生村の活性化と地域貢献活動の実践

～地域と大学をつなぐ職員の役割～

10時45分～11時25分

東海大学 九州教学部阿蘇教学課 課長補佐 高橋 誠二氏

東海大学阿蘇校舎は、東京ドーム16個分の敷地面積を有し、この農学部の敷地内に農学実習場や食品加工場を有している。在籍数は約1,000名、都道府県別在籍数を見ると福井県を除く全ての都道府県から学生が集まっていることが分かる。

在籍数の約8割が大学周辺の黒川区に居住しており、ここでのより良い生活環境の確保は、学生のキャンパスライフ充実のみならず、大学活性化や地域活性化にもつながってくる。校舎周辺地域もキャンパスの一部と考え、「食・住環境」の整備の必要性を問い、地域と大学が一体となり学生を支援することを目指している。

逆に、居住形態が一人暮らしの学生は下宿に比べて友人を作る機会が少なくなり、親しい友人や相談相手がいなかったことで学業不振や退学につながる危険性も考慮し、キャンパス内外で学生間の交流を促進している。

さらに、女子学生が増えているため、防犯・防火・防災活動に関する取り組みにより、治安が良く、安全で安心できる生活環境づくりが必要であると考えている。

このような目的を達成するため、地域と連携し、学生の生活環境整備・充実を図るため、1994年度に黒川学生村連絡協議会の発会準備を開始した。長陽村（現南阿蘇村）は、東海大学を「村にある大学」として広報活動していたため、大学側からの本協議会発会提案の快諾につながり、地域の下宿・アパート組合との協力体制も確立し、1995年7月に本協議会が発会した。大学と地元住民、行政と学生が四位一体となり、黒川地区に在住する学生の生活環境整備と充実に努め、黒川地区の生活と文化の向上を図ることを目的とした協議会規約を、第1回総会にて定めた。

2013年度の総会（年1回開催）には、学生55名、下宿・アパート組合の家主18名、南阿蘇村役場から2名、区長、婦人会長、大学から3名、総勢約80名が参加した。地域住民には「学生を育てよう」という意識、学生には「自分達の居住している村は自分達で守らなければ」という意識が芽生え、黒川学生村連絡協議会は情報交換や問題共有の場としてだけでなく、それぞれの立場での意識向上につながっている。年間行事として、美化活動や防犯パトロール、スポーツ大会や防火防災活動などを行い、本協議会の存在意義と目的の達成に向けて活動を続けている。

その他の活動として、大学からJR駅間の観光バス「ゆるっとバス」の増便を本協議会より  
請願し、2便/日から20便/日に増便することができた。これにより、学生や地域住民の生活  
環境における利便性向上を実現した。また、阿蘇校舎近くの村道にLED外灯を設置すること  
で防犯レベルの向上を推進している。

大学の地域貢献活動を事務職員がサポートしている例として、東海大学チャレンジセンター  
の各プロジェクトにおけるコーディネーター制度がある。

阿蘇校舎で展開しているプロジェクトは、阿蘇地域の農家へ農作業応援ボランティアを行う  
「阿蘇援農コミュニティプロジェクト」、捨て犬や捨て猫など不幸な動物を一匹でも減らす  
ことを目的にイベントや啓蒙活動を行う「あにまるれすきゅープロジェクト」、絶滅危惧種の  
希少昆虫や植物の保護・保全活動に取り組んでいる「阿蘇は箱舟プロジェクト」の3つである。

学生はチャレンジセンターの教育目標（4つの力）達成に向け、これらのプロジェクト活動  
に取り組む。この活動をコーディネートする事務職員は、プロジェクト支援を通して専門教育  
を担う教員とは違う役割を担うことができる。学生生活充実度調査では、約9割の学生が学生  
生活に満足していると回答している。大学の主人公である学生が満足していれば大学は活性  
化する。社会と大学をつなぐ役割を職員が担うことにより、学生による地域貢献活動が積極的  
に行われ、地域社会の活性化と大学の活性化を実現することができる。人と人をつなぐシステ  
ム、その一角に職員の力は必要であり、点を線に、線を面にするような活動を今後も継続して  
いきたい。

### 3) 施設見学と紹介（農学教育実習場）

11時40分～12時30分

以 上

